茶の湯十躰

全

20×20

茶の湯十躰

茶の湯者の覚悟十躰の事

一．上を麁相に下を律儀に物の筈の違わぬ様にすへし上を麁相にわざと拵ると思ふべうらす是隠退の所なり前に能いひなして跡の夫程になきハ見苦敷なり

古者言濃不出恥躬不逮也といふ
所を知へし上ハそれ程二なくさて
内心眞実にもてなし馳走するは
見事也是貪者なと不及事を
是悲結構にせんとおもふは是
また実にあらす僞也身分相應
にして志を守一とするは誠也

人に出合功言令色にして内心麁
末なれは何と隠しても永き内
には見さけらるゝ事也君子和而
不同小人同而不和と言う古人の教
奇者は茶の湯會席ハ靏（ばと）の汁
を鳫とい小鳫の汁を亀と云なり
謙退の心なり僞とおもふべからす

数奇屋の道にて一入軽く諸事
まする所肝要也志は深く厚
く真実と知るへし人に物を頼
れて随に不請合さて心中には大
事に心懸如在なく随に其事調
様にする也又世間躰数奇者ハ頼
まれさる事も手前より随にうけ計
合跡にて麁末にして不答になる
是表裏なり

一
萬事物の嗜并気遣専らにする事
佗は一入道具の数も少く度々出す
ゆへ様する也然而油断すれはつゞ
かぬ故おのつから常によく嗜て
持ゆへ久敷用ひてもそこねす奇

麗なり諸事に嗜念を入座し
物をたしなむ事諸道具さへ右之
通に心懸されば永く用ゆる事
ならぬといふ事を心得なから夫
より大切なる心の嗜を始終慎み
なく人にも交り身も立永く楽
所を心かけざるは口惜き事也

心を用ゆるといふは志をふかく
求察する事也差當り数寄に行
ても亭主の人を知る所に心を用る
所なり万事気づかひする所より
はじまり亭主の心を用ひ諸
事念を入る所に心つかぬは
亭主気の毒と思ふへし　然ル

間路次数奇屋石の居様會席
諸道具并置合亭主の心をつ
くしもてなす所を客心なくし
ては口惜事也亭主の心を察
して物語挨拶も相應なるは
亭主も心よく面白くおもふへ
し心遣ひ肝要なり数寄一會
の内ばかりならず数寄者の心
は茶の湯せざる時も同じ事なり

一　奇麗数寄心中猶以専ら也奇麗に
あらされは諸事さらくとして
むさく甚上心の内もさつはりといさ
ぎよからす然る間奇麗数寄す
へし常一心の掃除肝要也日々

新にして又日々に新なり

一　朝起庭ばなし會の朝は寅の一天が茶の湯仕かくる也朝早く起こゝろの塵をはらへ茶の湯を仕懸ると言傳へたり朝より心かけ座敷も奇麗に掃除する也朝寝する人は心とろける物也朝は気治り心身静なるゆへ諸藝心懸る人朝早天に修行すれは心に能学ひ徹するゆへ髄に覚也惣して其日終日までの事朝に極るものなり朝寝する人は怠り多く出日たけて起ても心闇敷ゆへ必行も疎末なる

ゆへ用事も調兼るもの也又朝寝
すれは起候ても心とろけて物事
むつかしき也怠り多く油断にな
る也然ㇾ間四民ともに朝寝する家
は貧と云ゝ病者と老人は用捨有
へきか去なから楽有れは氣す
へ我儘になり程を知らす却而

わすらい出る事あり自己に心を
顧見能程有へし老人病人は
最早米も無しとて遊ひに〱
にて天より相定寿命程なが
らへす食傷中風なとにて
早死する人も多し

一 酒を過す事又婬亂

事酒宜程に呑樂とするはよし然れ共はじめハ酒を樂とするおもひ後には心酒に呑るゝと世間にいふもむべなり婬乱になる事元来夫婦陰陽の道子孫繁昌の礼なれども猥りに心にまかせ婬乱樂なりとおもふて病者になり短命なるも多し能ゝ慎へし数寄道は志を立契をたのしむ所に二色ともに通れはかならす物ぐさくなり色あしく契事なく荒肉代人の

20×20

一

茶の湯は冬春雪を心にかけ晝夜すへし夏秋は初夜迄然るへし月の夜は独りなり共深更に及ぶへき也茶乃事もとは隠者か老人抔のもてあそぶよし座敷を囲ひ炉に火を置釜を掛楽ムゆへ十月より寒氣をふせき面白し然る間冬今春雪の朝一入たのしひなり又暖氣になりて風炉に移りて彌數楽なり夏の日の暑気強に數寄屋囲の狭所に風呂を仕かけ嘸あつからんと思ふに路次に水を涼しく打ゆへ

20×20

おもひの外数寄屋の會は涼しくなるものの世又床へ花を入露はさつはりと打又置合取合を寄麗にさつはりと亭主心遣ひによつて面白し夏は夜短く蚊多ゆへ久敷は面白からす秋に至りて月の夜なとはひとり成甚深更に及ふは一入面白し是人の茶の湯にあらす所を能知るへし四季甚風流に詩人哥人の心を用ひ春は万物始る所なり詠歌大概に情は新をもつて先とし物感し和する所なり春夏秋冬の

20×20

時に應し物につれて風流に
移りかわりのたのしひ面白き
所を知るへし

一 第一我より上なる仁と知音する
事専世人は見知り寄合へき事
肝要也と云々我より上成人といふ
は諸藝に通し信心深く人柄

我より上なる人をいふなり悪
處合点すれは我より大身なる
人富たる人とおもふは以の外
なる義なり徳ある人身の行正敷
人に交る時自然に己か心身共
に道ありといふ義を一心懸てよし
悪敷友に交われは自然に

惣移るなり悪人と同道すれ
は子を抱て坂を上るが如し一人
失脚両人遭殃といへり去なから
如此はかり偏におもひ友を非
にしらす嫌ふ事然へからす已
の心正しき時は何をけかさんや柳
下恵の事おもひてよし

一
茶の湯座敷露地景地勿
論竹木松竹有所并疊を直ニ
敷事取わけ専なり心有もの
家居路次の竹木の植様まて
も心をもつてする所数寄者の
嗜也是又誠を以てするゆへ内心
にも移へし客に心有へし亭

主の心を能々察へし路地入座
敷入すへし竹木松竹専ら面白
く四季共に替事なく昔より
用ひ来りたり共聞へたり畳に
高下あれは道具と居心に任せ
す悪敷事なり侘も畳に直に
居る事になる事世然るを侘

と斗想ひなすは麁末にする
心を用ひさる故也桑山左近今
の数寄屋を建られたる時一両
年前に苦竹をむさと澤山に植
松なとも植て両数寄屋建る前先
違而地形之所并道筋飛石杯
居る所は村々廣野にて有かつ

こう能様に竹を掘ぬき数奇
屋を建られしよし殊の外さび
て面白き路次のよし申傳候尤
能路次見られ候衆の噺もうけ
たまわり候

一、善き道具を持事但珠光并
引拙紹鴎宗易此衆心に懸られ
候茶の湯道具専也此人々用ひ
たる道具は何も目利よく高直
成ものゆへ善と斗心得ては本意
にあらす此人々隠なき数奇
者ゆへ為人数奇道具なる所に
心を寄て見て尤器物の
律り合景の所すきさる所に

心を付て扱合点せさる道具
も定て面白き所有て数奇に
入たるものなるへし己未至さる
ゆへとおもひ先輩にも尋自己
の心に求へし数奇の心を知る
所工夫すへし利休所持之茶
入小ぶり成唐物茄子物相

と名を付秘蔵せられしよし
木葉猿とも申候よし此茶入唐
物薬多て土心よく何事も悪事
無之候外はあまり能過たるよし
にて胴を少しすりて態と
疵を付られしよし一入名高く
なりたりと聞傳へたり今時

の人は疵有之物ハ嫌ひ無疵なる物はかり人々もてはやす織部殿御所持の瀬戸の茶碗無疵ハぬるし面白からすとてわざ〳〵打かきうるしにて継目の見へる様に繕ひて御用ひ候よし是又名高く聞へしと承候何ても器物の所にわ無之候数奇者の心は感じたり

一　茶の湯者は無能なるが能也

紹鷗弟子に　といふ人有

廿年也茶の湯に不染身さへ何の道にも無上手かれ是に心をか

けはこと〱く下手を取へし但
物の文字はかりは可嗜と云々
諸藝廣きは能事なれとも
彼是としては初め少し数
寄ては又雑の事に取懸り度々
如此にて一色も学ひ得る事な
し年の寄まで下手なるは

無稼事也これ心を留ぬゆへ
なり然る間諸藝を習ふ
に己面白きとおもふ藝を一
色とくと学ひならひ覚ゆれ
ば甚力をもつて道理通し
外の事少し習へは則通る事
多し世の中すへて何事も

下手にて果つるは別の藝諸事
見てもならひても自書しるし
稽古せされは覺事薄く文
字を暗へしと有事ハ書付る
ものゝ道理天然受たる讀さる
ゆへ文字千字を覺へよといふ事
世何程文字覺えても書物の上に
ては諸藝の義も深き道利
心に求されは年老迄しらす
して果るもの多し

右

覺悟十躰　終　休安庵　藏

文化十五年春

松月庵鈴木九敬宗如傳来

船津金松